

## 第三章

---

栄光とそれを支えた人々

# 全日本学生剣道選手権大会ベスト8



全日本決勝で大城戸選手（松山商大4段・右）が水田選手（明治大）をツキで攻める。  
（剣道日本・昭和52年8月号）

## 幸運だった 全日本出場

第二回全日本女子学生剣道選手権大会三位

広島商科大学 昭和四四年卒

梶村（旧姓高畑）美恵子



香川大学の山神先生より突然原稿依頼を受けまして、びっくりしますやら、また、もう何年前のことやらと思ひ出を手繰ってみるようになりました。

昭和四三年六月二三日、当時広島商科大学（現広島修道大学）の四年生でした私は、日本武道館で開催された第二回全日本女子学生剣道選手権大会に中国地区代表で推薦出場し、三位に入賞しました。

そのときの我が大学剣道部の最初の女子部員であった私は、毎日男子部員に混じって稽古にはげんでいました。女子だからといって特別扱いされること

もなく、全く男子と同じメニューをこなしました。でも稽古は楽しくて、稽古するだけ自分に力がついていくことが実感できるというふうでした。県立体育館の武道場にも稽古に出かけ、五月女武治先生にはとてもお世話になりました。しかし、なんといっても女子の剣道人口は少なく、広島大学に何名かいましたが、女子の対外試合の出場の機会はなく、もっぱら部内の男子相手の練習試合に出るくらいでした。実は私の推薦出場は幸運だったのです。広島には私と同級生の松尾和恵という女子剣道では全国的に有名な剣士がいます。日本体育大学の学生である彼女は東京の地区予選を勝ち抜いて本大会に出場しました。彼女が出身地の広島から出れば当然私の出場の機会はなかったかもしれません。おまけに大会前上京した私は彼女の下宿に泊まり、日体大の道場で稽古させていただきました。地元しか知らない私にとって貴重な経験でした。

大会当日、私は無我夢中のうちに一回戦二回戦と勝ち抜き、気がついたら準決勝戦になっていました。対戦相手の名前等は覚えていませんが、お互い一本ずつ取って最後に引き面を取られ敗れました。松尾和恵も準決勝で敗れ、偶然にも彼女と私が同じく三位ということになりました。三位決定戦がなくよかったです。現在では全日本に出場するということはとても大変なことなのですが、少々古いよい時代のうれしい思い出となりました。

あれから二七年近くたちました。途中で長い空白もありましたが、やはり剣道が好きなのです。四〇才前に稽古を再開して現在は時折学生剣道や少年剣道大会の審判を務めさせていただいたりしております。

# 栄光をみつめて



初優勝のガッツポーズ

## 思い出の一本

第三五回全日本学生剣道選手権大会優勝  
松山商科大学 昭和五三年卒

大城戸 功



昭和五一年の全日本学生剣道選手権大会で、私は明治大の選手と三回戦で対戦し一対一から延長戦に入り、面の相打ちとなり、わずかに自分のほうが早いと感じたのですが、結果は相手の面に旗が上がりました。そしてその人はその大会で三位となったのです。その頃から関東・関西勢は強い、というイメージが薄くなっていきました。そんな気持ちを持ちながら昭和五二年の春、関東に遠征し中央・法政・早稲田の三大学に胸を借りました。遠征を終えたときには、自分の持ち味である攻めに徹していけば「かなわないことはない」と確信しました。

五二年の六月、学生最後の選手権、「決して臆するな」と自分に言い聞かせ試合に臨みました。調子は尻上がりによくなり、気力も充実し、緊張による睡眠不足のけだるさは消えていました。準々決勝では一本を先取され、苦しい戦いとなりましたが、捨て身の技が功を奏し、何とか切り抜けることができ、準決勝も無難に乗り切り、決勝戦に進出。

決勝では五分で勝負がつかず延長となりました。対戦相手の水田選手（明大）は懐が深く、再三、面に飛び込んでいくのだけれどわずかのところかわわされてきました。

勝利がちらついて、無難にいかうとして攻めが中途半端になっているのじゃないか、そんな分析を試合中のわずかな時間にできたのですから、かなり冷静に試合を運んでいたと思います。

自分の一番信頼する技で勝利を掴む以外にないだろうという決断に達し、一度間合をきり遠間から強い勢いで攻め、飛び込み面を打ち込みました。相手は退きながら面をかわそうとしたのですが、退くのがわずかに遅れたのでしよう、私の竹刀は面に届いていました。この一本が今でも私の脳裏に焼きついているのです。

全日本学生選手権というビック・タイトルを手中にできたのは「同じ年令で、同じ人間、攻めに徹すれば、かなわないことはない」というふうに考えたからだと思います。

私はこの頃、就職で、ある夢を追っていました。そのため剣道は趣味の一つとして続けるつもりでした。しかし、この優勝で私は熱心に誘っていただいていた愛媛県警に就職したのです。自分の剣道の可能性を追求してみようと思ったからです。水田選手との一戦の、あの一本が私の剣道人としての出発点といえるかもしれません。

# 二つの課題と 取り組んだ 学生時代

第二・二四回全日本女子学生剣道選手権大会三位

島根大学 平成三年卒

中塚 美枝



私が全日本女子学生選手権大会に出場したのは、大学二年生のときと四年生のときでした。この二回の大会、ひいては大学四年間を通して、ずっと私が課題としてきたことは次の二つのことでした。

一つは、大学に進学する一か月前に左足のアキレス腱を切ったことで休んだブランクを取り戻すことでした。稽古ができなかったことでの体力的な減退はもちろんのことですが、私にとってはむしろ精神的なブランクの方が大きかったように思います。中学、高校時代と剣道づけの毎日を送っていた私にとっての自信は、稽古をすることについていっ

したので、アキレス腱を切ったあとの後遺症と稽古不足は即、自信喪失、緊張へとつながっていききました。ですから、試合前になるとまずこの不安を取り除くために、それまで自分がやってきた全てのことを振り返って「大丈夫、勝てる。」と暗示をかけたたり、「こんなことで今まで積み上げてきたものが台無しになってたまるか。」と自分を奮い立たせたりして、気持ちを作っていました。

また、大学に進学して剣道を取り巻く環境が大きく変化した中で、それまで自分が経験してきたこと、積み上げてきたことをいかに生かしていくかが、もう一つの大きな課題でした。それまでは、剣道をする環境を用意され、その中で自分なりにがんばってきたつもりでしたが、大学では自分でその環境を作り、考えながら稽古をしなければなりません。このことはとても難しい課題ではありましたが、大学の先生方や剣道部員の人たちの支えがあつて、どうにか四年間がんばってこれたような気がします。

このような二つの課題を持ちながら臨んだ全日本女子学生選手権大会では、川俣選手をはじめとする有力な選手と対戦しましたが、関東や関西の選手に負けてもともとというのは嫌だったので「最後まで諦めないぞ」とそれだけを考え、胸を借りるつもりで戦いました。結果三位という成績は、私がそれまでに残した個人の成績の中で最もよい成績でした。

がむしろにやっていた時代に残せなかった成績を大学で残せたということで、大学時代だけでなく、それまでの剣道人生が実を結んだような気がして本当にうれしかったことを覚えています。そして、この自信は社会人となった今も心の奥底で私を支えてくれています。

# 大学時代に 得たもの

第二六回全日本女子学生剣道選手権大会三位

松山大学 平成七年卒

神谷 圭紀



私にとって大学での剣道は、精神的にも肉体的にも鍛えられ、たくさんの良い経験ができました。高校までは、稽古なども先生に強制的にやらされるという所がありました。が、大学では大人として扱われ、自主性ということに大変重点が置かれていたように思います。

高校までと、大学に入ってから私は、試合での、いわゆる勝負に対しての考え方が大きく変わりました。

毎日の稽古も、ただ漠然とこなすのではなく、稽古の前には今日の課題というふうに、自分自身の中で考えながら取り組むようになり、いかにして自分の最大限の力が試合で発揮できるかということが常



# 最高の思い出

第24・25回全日本女子学生剣道選手権大会ベスト8

聖カトリナ女子大学 平成四年卒  
加茂信美



この度、学連発足四〇周年を迎えるにあたり、記念誌が刊行されます事を心よりお慶び申し上げます。同時に素晴らしい歴史の重みを感じつつ、非力ながら関わる事ができました事を大変光栄に思っております。今回、香川大学の山神先生より原稿の依頼を受け、恐縮しています。ここに全日本の思い出を振り返りながら書かせていただきたいと思います。

幼少時からの念願でもあった日本武道館で試合する切符を手に入れ、一九九〇年六月三〇日ついに全日本初出場の日が来ました。大会二日前に東京入りをし、初日は筑波大学へ出向き、充実した稽古をさせていただきました。試合当日の朝は六時前に目が覚め、同僚と近くを散歩するなどして緊張を和らげました。

初戦は思うように体が動かず、延長戦での勝負となり、何とか突破する事ができました。

三回戦では、その年の関西チャンピオンである天理大学の牧野さんと対戦しました。いつも春期間関西遠征で稽古等をしていて剣道を知っているせいもあり、前半はごちない展開になりましたが、中盤以降、余裕を持って相手を見る事ができるようになり、自ら攻め一本先取し準々決勝へ進出しました。対戦

者は、昨年準優勝の金沢大学の小田さんでした。ここでは、気迫・攻め共にまさしく完敗でした。試合終了後、自分の無力さ、稽古の甘さ、そして何よりも精神力の弱さを痛感し、最初から出直しだと武道館を後にしました。

それから一年後、中四国予選を通過し大阪にやってきました。一回戦の相手は、インターハイ等で輝かしい戦歴を誇る東海大学の松浦さんでした。試合中は、余計な事は考えず、とにかく一回戦を勝つ事だけに集中し無我夢中でした。延長戦で小手を奪取しましたが、どのように技を決めたかという状況は、ほとんど記憶にありませんでした。

そして準々決勝では、鹿屋体育大学の西さんと対戦しました。足を使って間合を取りながら休む事なく攻め続けてきました。

冷静に、一本勝負のつもりで挑みましたが、面を合わされ一本負けでした。結果はベスト八止まりでしたが、悔いはないと確信しています。

現役を引退して三年近く経ちますが、目を閉じるといろいろなシーンが甦り、耳をふさぐと歓声がこだまします。

たくさんさんの恩師、仲間達との出逢い、最高の青春時代の思い出を与えてくれた「剣道」に私は感謝の気持ちで一杯です。

聖カトリナ女子大のみなさんと一緒に



に念頭にありました。

大学での一番心に残っている試合は、二年生の時に全日本女子学生剣道選手権大会で三位に入賞したことです。五月の中四国の大会で優勝することが入学当初からの目標で、その目標を達成し、さらに全日本で三位になるなんて、夢のようでした。

全日本に出場が決まった時は、自分の力は全国には通用しないだろうという縮めと、負けてもともとだから思いきってやろうという楽な気持ちの自分がいました。

そういうリラックスした気持ちで臨んだのが良かったのか一戦目を二本勝ちで収めることができました。一戦目を終え、体もよく動くし、組み合わせも中々いいみたいだし、もしかして案外上の方までいけるかもしれない、という欲が出てきました。その後、準々決勝で一本取られたものの、すべて二本勝ちに収めました。

そして準決勝。さすがに、こんな所にもいいのだろうかという不安に襲われ、それが試合にも出たのか、一本負けを喫してしまいました。今でも、最後の試合だけは悔やまれます。

ですが、全国でも自分の力は通用することが実感でき、満足しています。そして、それ以後の試合への自信につながったと思います。

この四年間、私がんばってこられたのも、先生方、先輩方の御指導と、なによりも仲間の支えがあったからだと思えます。感謝の心を忘れず、私が大学時代に得たものを胸に、これからも日々努力していこうと思えます。

# 中四国学生剣道選手権大会連続優勝



第18回大会での決勝戦。手前の愛媛大長栄選手が山口大の大家選手に対し、二本目のつばぜりからの引き胴が入り、優勝が決まった瞬間。

## 無欲の勝利

第一六回中四国学生剣道選手権大会準優勝 第一七・一八回連続優勝

中四国学生剣道連盟四〇周年おめでとうございませう。記念誌の原稿依頼を受け当時の事を思い出そうとしましたが、何分二〇年以上も前の事ですので、その頃の愛媛大学剣道部の機関誌である「ますらを」やアルバム等をつ張り出して記憶をたどりながら、当時の事を書いてみたいと思います。

私は中四国の個人戦では大学二年の時準優勝、三年四年と優勝をしました。二年の時は恐いもの知らずで決勝戦迄勝ち上がりましたが、決勝戦の相手が松山北高の先輩で高知大の中島先輩でした。中島先輩は私が高校入学した時の主将で、毎日しごかれていましたので、「こんな人に勝てるわけがない」と思いつながり試合に臨みました。一本一本の後大きく振りかぶって意表をついた面に出ましたが、先に胴を抜かれて負けてしまいました。別に悔しいとも思わず、むしろ一本とれた事に満足をしておりました。その後全日本学生選手権に出場し、関東関西の層の厚さを目の当たりにし、「これは中四国では絶対に優勝しなければならない」とその時初めて自分自身で誓った事を覚えています。



愛媛大学  
昭和47年卒  
長栄周作

しかし、三年四年の時は、両試合共最悪のコンディションでした。と言うのは、大学二年の九月に学生紛争のあおりを受け大学がストに突入、やがてスト解除になりましたが、そのおかげで試験日程がずれ、丁度五月の中四国の試合と試験とが重なってしまったのです。私は普段からあまり勤勉な方ではなく一夜漬けのタイプでしたので、睡眠不足と稽古不足で試合に臨みました。

結果は優勝しましたが、途中で苦しかったのは山口大の突貫選手と対戦した時、それから決勝戦の松山商科大学松本先輩との試合でした。

四年の時は試合の二週間位前に松山商科大学との練習試合で背中を痛め、左半身が麻痺し左腕が動かなくなっていました。運よく東京から有名な整体の先生が帰って来られており、父の紹介で毎日そこへ通いました。結局試合前の稽古ができずぶつつけ本番となりましたが、不思議と体が良く動き、優勝も確か一分以内で勝ったと記憶しています。

このようにコンディションの悪い時に勝てたのは、そういう状態だったからこそ無欲で戦えたことと、運が良かったおかげだと思っております。

この連続優勝は、私の剣道人生の中では自分にとっての大きな自信となっております。また少年剣道の時の岡本要先生、高校の時の佐伯蔵先生、大学の時の青木恒男先生と立派な指導者に巡り会えた事も、私の剣道人生の運の良かった所だと思えます。

現在、私は松下電工剣道部で監督をしています。私がこれまでに先生方から色々な意味で教えていただいた事の何分の一かでも若い人達に教える事ができれば……という気持ちで、今も剣道を続けております。

# 栄光をみつめて

## 剣道に感謝

第三回・三二回中四国学生剣道選手権大会連続優勝  
広島大学 昭和六〇年卒

菊池 廣

広大を卒業し一〇年が過ぎようとする今、改めて現在の自分を思うと、大森先生をはじめ多くの先生方のお教えと御恩の深さ、剣道を通して得たもの大きさ、ありがたさをつくづく感じます。

当時はふりかえってみますと、山形の田舎から出ていった私でしたが、最初に中四国選手権大会を見せてもらって、正直なところ、あまりレベルは高くないなと感じました。ところが、二年生として初めて選手権に出場させてもらった時は、二回戦であっさり負けてしまったのです。この時の悔しさが、私の起爆剤になったのかもしれない。

大森先生にお聞きしたこんな話を覚えています。あれは、確か正月の寒稽古の時だったと思います。全日本選手権の優勝者が、次の年の大会で一回戦で敗れた時に、その理由を今年の寒稽古を積まなかったからだと言ったのだそうです。稽古の成果が現れるのは早くて半年かかる、というお話でした。三年で初優勝した時は、もちろん優勝など頭にな



く、ただ一つ一つ勝つことを考えていたように思います。精神的にゆとりがなく、やっつことことで決勝にすすみました。相手は徳山大の森崎君でした。確か二本ほど小手のいい所を打たれて「やられた」と思ったのですが、旗が上がらず運よく勝たせてもらった試合でした。大森先生には試合のあと、「菊池にしては、できすぎじゃのう。」とお誉めの(?)の言葉をいただきました。

四年のときは、当然ブレッシャーはありましたが、四年の気楽さからか調整がうまくいきました。技は持っているものしか出せないの、精神的に安定させるため朝もかるく稽古をして体を慣れさせたことを覚えています。

決勝では、同じ広大の月原君対出射君戦の勝者とあつたのですが、同門ということで気分的にも楽だったのでしよう。これも運よく、月原君に勝たせてもらい、一生に二度とない栄光を手にすることができました。

こうしてふりかえってみますと、大学時代に大森先生に教えていただいたことは、今でも私の人生の土台になっているように思えます。そして、剣道を通して築くことのできた仲間との絆も何ものにもかえられないものです。改めて剣道に感謝するばかりです。



# 剣道に賭けた青春

第七・八回中四国女子学生剣道選手権大会連続優勝  
山口大学 昭和五二年卒



八代 靖子  
(旧姓住田)

私は、諸先生方・先輩・同輩・後輩のお蔭をもちまして、山口大学三年と四年の時に中四国大会で連続優勝し、全日本女子学生選手権大会に出場することができました。一番印象に残っているのですが、この事について書いてみようと思います。

第九回大会（昭和五〇年）は、私にとって初めての全国大会で、やっと念願が叶ったという思いがありました。また、「一生、出られない人もいます。」という友人の言葉も忘れずにおこうと思いました。ドン、ドン、と太鼓が鳴り、控え目の照明がパッと明るくなり、選手入場……感動したシーンです。結果は、一回戦・小手一本で負けましたが、小手に当たった感触がなく、審判の一人は旗を上げておらず、納得できない試合でした。

第一〇回大会（昭和五一年）は、勝ちを体験できましたが、三回戦で実力者黒須さんと対戦しました。二本取られて負けましたが、その内一本、出小手。これは、ズシッと重みのある小手で、「役者が違う！」と心の中で呟いていました。試合後も暫く打たれた

中四国剣道連盟発足四〇周年おめでとうござい  
す。

この度の記念誌発刊にあたり、中四国大会個人戦での連続優勝の思い出を、との原稿依頼をいただいたわけですが、私は記憶力が悪く、当時でさえ試合が終われば相手の名前、決め技を忘れてしまいましたので、一〇年も前のことは忘却の彼方に行ってしまった、呼べど帰せど戻ってきませんでした。そこで同期のメモリーバンクこと倉知さんに聞いてみたところ、個人戦ではあまり危なげなく勝っていたけれど、ただ先輩方のプレッシャーと怪我の多さに悩まされていたとのことでした。

## 勝利の三点セット

第二六回・一七回中四国女子学生剣道選手権大会連続優勝  
香川大学 昭和六二年卒

嘉島 (旧姓江草) 幸子



言われてみれば、練習中に腰を痛めてからは膝の関節炎、足首の捻挫等、常になんらかの故障を抱えており、万全の体調で大会に臨んだことはなく、それでいて上位に入賞することを要求されていました。そんな私が中四国の大会で勝つたのは、故障が常態になっている中でのベストコンディションを作る、相手に打たせない、演技力、の三点のお陰ではないかと思っています。

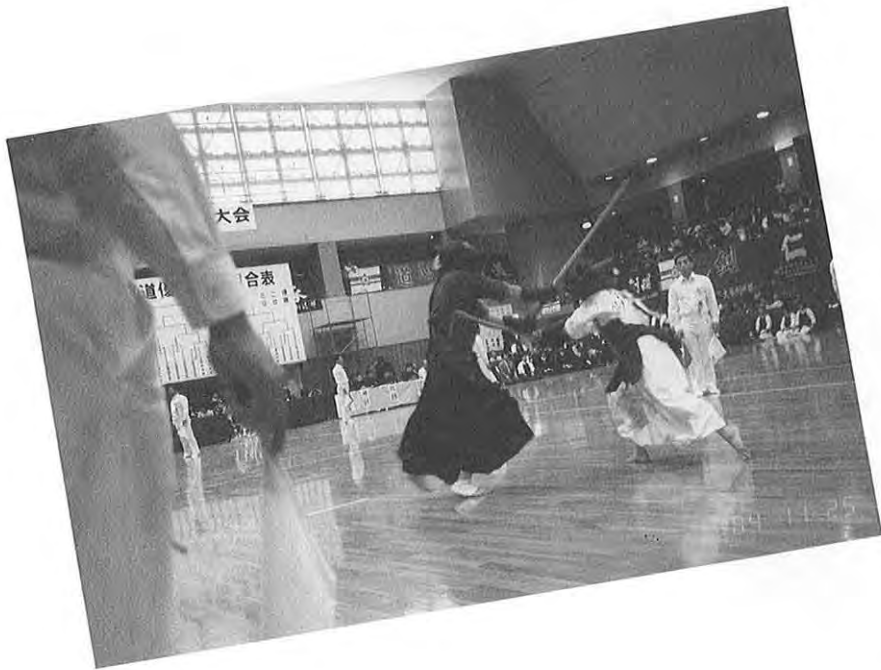
コンディションに関しては、悪いところはテーピング等でごまかしつつ、体をあまり動かさないかわりに、瞬間的に動けるよう気力を充実させておくようにしていました。

また、自分が動かない、ということとは当然相手の方が打突の機会が多いわけですから、練習の時から、性別を問わず、相手が上段者であろうと打たせない、という気持ちで剣道をするよう心掛けていました。最後に演技力については、皆さん剣道に演技力？と疑問に思われるでしょうが、私の実感から言えば、優勝の最大ポイントになっていたと思います。

誰に対して演技をするか？ 当然審判に対してです。相手の有効打突に旗を揚げさせず、自分の一本にならない打突に旗を揚げせよう。そのためには、審判の目を考えて自分に有利な位置に回り、当たった打突でも防いだように見せかけ、不十分な打突にメリハリと勢いをつけて当たったように見せかける。だから、私と試合をした人の中には負けただけに納得のいかない人も多かったと思います。

「栄光」というにはあまりにもせこい内容ですが、学生の頃心掛けた三点は「最小限の労力で最大限の効率を」という形に変わって、主婦・母・労働者の三足のわらじを履く身に今も生きつづいています。





感触が残っていました。両大会とも、剣道にも人生においてよい肥やしとなりました。

日々の練習については、個人競技だけに練習後のお互いの批評が大事だと思いました。しかし、最後に頼るのは自分しかないという孤独感も感じました。闘争的な競技なので、良い結果の出た帰途は穏やかな気分です。充実感も味わえました。

その後、十数年間竹刀を握っておりませんが、左手の薬指と小指のつけ根には、豆が消えずに残っています。一時期、一つのものに賭けた事の証として、私はこの豆を誇りに思います。

## 告白

第一八・一九回中四国女子学生剣道選手権大会連続優勝

広島大学 昭和六三年卒

楠本 (旧姓石原) 真紀

「今日は誰に負けるのか……」二年生の時、初めて出場した中四個人戦ではあっけなく初戦で敗退したので、そんな気持ちになったのでしょう。いえ、思い返せば、どの試合に臨んでもいつもそう思っていたようです。

「やれるだけの稽古をし、自信を持って試合に向かう」しばしば耳にする言葉ですが、結局、卒業するまでは一度もそういう心境にはなれなままでした。「自信」をつけるということは、とても難しいことだと思えます。

試合会場で各校の練習風景を見ると、「今日、負けそうな人」がわかってきます。不吉な予感とでもいうのでしょうか。私はすぐそんなものに支配されてしまうのです。その日(三年生時の中四個人戦)

弱気にさせられたのは島大のKさんと香大のEさんでした。「この人達から二本は取れない」そう思いました。先に一本取らなければ必ず負けると思った私は、まず先に対戦するKさんの前では絶対に得意技を使うまいと考えました。当時私は先輩からせこい引き技を習い(ごめんなさい)、わりと使えると思っていたので、この一本にかけたのです。でもKさんに警戒されては歯が立ちません。ですから、それまでの試合にはどんな苦戦しても、決して引き技を出しませんでした。そしてその作戦は、なんとか成功したのでした。次の対戦は最大難関ともいうべきEさんでしたが、これはもう胸を借りるつもりで、ただ夢中でした。たまたま勝てたのであって、運が良かっただけです。そして試合後、Eさんが私に「優勝しなさい。私に勝ったんだから。」と励ましてくださったことが忘れられません。

次の年は、試合の日が近づくにつれ激しいプレッシャーに苦しみました。負けることがとても恐ろしくて、友人に「今年は勝てん。」といつもこぼしていました。去年のようにうまくいくとは、とても考えられなかったのです。

勝負にこだわりすぎるのは本来のねらいではないのでしようが、剣道を「道」としてではなく「競技」として大きくとらえていました。ですからいつも勝負におびえ、心乱れた学生でした。しかし幸運が二年続いたことは最高に喜ばしいことでした。

こんな私を熱心に御指導下さり、見守って下さった先生方、先輩方、そして辛い稽古に共に耐えてくれた同級生、後輩の皆様感謝の気持ちでいっぱい입니다。ありがとうございました。

# 中四国学生剣道優勝大会連続優勝



大会にのぞむ岡大のメンバー

## 連続優勝に輝いて

第六・七・八回中四国学生剣道優勝大会連続優勝

岡山大学 昭和三八年卒

宮野健治



昭和三四年から、わが岡山大学剣道部は中四国学生剣道大会において、三年連続団体優勝に輝き全国大会に駒をすすめました。

入学当時、岡山大学剣道部は前々年に団体優勝し、OBの中にはアメリカに遠征した先輩がいたことも聞いていました。

この年は剣道部に一八名が入部、有段者は二名、後はほとんど初心者でしたが、当時としては大人数の学年で、それぞれ個性に富んだ良き仲間でした。男ばかりの汗臭い狭い部室で、両隣が児童文化部や書道部など、女性の華やかな声がよく聞こえてきてうらやましがったものです。皆、一日中剣道部室にいて、そこから授業に出っていました。蛮カラ気風の個性の強い先輩方でしたが、先輩・後輩の関係はとても良く和やかな雰囲気でした。

当時、部長は禅とアメリカ文学の安藤正瑛教授で、合宿時にはよく座禅を組まされていました。師範の

小橋嘉平先生は小柄ながら大技を使われ、壁にぶつかるような感じでした。

剣道場は昔の兵舎の跡で、練習中によく床を踏み抜き金槌をもって修理したものです。

春には新入生歓迎コンパがあり、桜の散る御野公園でしこたま酒を飲まされ、半年ぐらいは酒屋の前を通っただけで胸がむかついたもので、四〇才過ぎまで酒が飲めなかったのはこの時のせいではないかと思っています。

香川大学との定期戦、吉備津神社の野試合での優勝や県内六団体での優勝を積んで中四国学生剣道大会へ臨みました。私も一年生ながら選手として出場させていただきました。

夏の合宿は厳しく、一緒に合宿していた卓球部員が階段をとんとんと軽く上がっていくのが不思議で、我々は階段を這い這いしながらしか上がれないほどでした。

秋の護国神社での優勝や中国五大学での優勝、青春を謳歌した学祭での仮装パレード、冬の氷の板間での寒稽古、朝早く自転車で行った後楽道場等々、当時の想いが次々と鮮明に甦ってきます。

こういう一年時でしたが、中四国学生剣道大会で三年連続団体優勝できたのは幸運でした。私は三年生の予選大会まで出場した後、腰痛のため全国大会は断念、四年生の時には休学と、苦しい思いもありましたが、剣道とともに過ごした懐かしい学生時代が、私の心の中に今でも輝いています。

今も当時、ともに活躍した中四国各大学の仲間が、年に一回「真仁剣会」で交流できているのは、学生時代の懐かしい青春の絆が強かった事を物語っていると幸いです。

# 栄光をみつめて



優勝した鳥取大チーム  
前列中央で優勝楯をもつ洪山氏

## 剣道師範の思い出

第九回・一〇回中四国学生剣道優勝大会連続優勝

鳥取大学 昭和三九年卒  
洪山恒雄



鳥取大学は昭和三〇年に剣道部を結成し、翌年の第三回中四国学生剣道優勝大会の団体戦に出場したのが初めての参加でした。そして、初出場から六年後の第九回と第一〇回の中四国大会で連続優勝という栄光を得ることができました。

いま、その当時を思い起こすとき、すでに幽冥界に行かれた、故白井定彦師範のご指導を忘れることができません。ここに連続優勝したとき、選手であった湯村正仁君と白井先生の手記を紹介して、当時の様子を顧りみたいと思います。

「先生は剣道八段範士・兎山流十世宗家で、温厚な性格、稽古ではいつもニコニコしながら部員を手

玉にとっておられました。竹刀の動きも足捌きも、円をえがくように滑らかで、瞬時たりとも止まることがなかった。私たちは打っても打つのは空ばかりで転がされ道場から放り出され、稽古が終わるとグッタリしていた。先生は時には部員より早く道場にみえられ、自分で道場の掃除をしたり、壊れた床を修理しておられた。従って我々は稽古を休むなどという考えは毛頭浮かばず、講義が終わるとひたすら道場への道を歩いていった。対外試合に行く時には、いつも行を共にされ、試合前にはママシ酒を飲まされたり、往復一〇キロも歩かされたりしたが、うまくコンディションを作っていたように思えます。

また、白井定彦先生は、当時の思い出を「中四国大会で覇権をにぎりたい、そして、全国大会へも出場してみたい。責任感というか、兎に角稽古のきびしさ、長さで定評のある僕に負けずがんばって来た選手諸君、部員諸君もえらかった。本当に立派であった。その精進の結果優勝することができた。その時は胸が熱くなり眼がウルンで、あふれる涙を押さえられなかった。優勝してからが大変だ。勝って兜の緒を締めよの例の如く、毎日欠かさず道場に通り、何かの都合で部員が一人も来ない日があったが一人で素振りをし、シッポリ汗を流し帰った日もあったが、その後、意気まさに天を突く気概があった」と回想されている。

二人の回想をオーバーラップさせ、学生時代に中四国大会で優勝できたこと、剣道を通して築かれた師弟の絆を、青春時代の証として、いつまでも記憶に留めておきたいと思っている。

(鳥大剣道部誌「剣風」からお二人方の手記を引用)

# 連覇に向けて

第一六・一七・一八回中四国学生剣道優勝大会連続優勝  
広島大学 昭和四八年卒

下田 洋夫



私たちは、三年生になる前の春、ミーティング合宿を行ないました。幹部としてその年度の目標や取り組み方を検討するためでした。

私達が入学を許可されたのは、大学紛争最中のため、昭和四四年の六月でした。価値観の多様化で考え方の異なった学生が集まったわけです。学年のキヤッチフレーズを「華と嵐の四四生」としたものでした。

それが、幹部として剣道部をまとめ、引っ張って行かなければならないということで、皆がそれぞれの思いをぶつけ合ったのを覚えています。

主将に多幾山渉、主務に金子俊雄を決め、本部と福山分校のそれぞれの立場を確認し合いました。目標も当然のことながら『中四国大会連覇』とし、

『全日本大会入賞』をも掲げました。

私は、一年生の時から選手として試合に出場していましたが、その頃は「先鋒に続け、後のことは心配するな。」の先輩の声に送り出されて無我夢中で臨んだだけでした。二年生からは、福山分校での生活であり、本部（千田町）に合流するのは試合前や合宿等の行事があるときだけでした。

今までは、幹部の裁量で選手のエントリーからオーダーまで全て決定するものと思っていました。しかし、全て師範の大森先生にお伺いをたて、先生の考えられたことに従わなければならないことを知りました。

このように、一・二年生の時は、先輩の言われることに対して何も不信を感じることなく言われるままに行動していたわけですから、このミーティング合宿での情報は、目新しいことが多く、運営の難しさを痛感しました。

それと同時に、これからの剣道部は自分たちが打ち出した方向性を基に動いて行くのだという満足感と使命感で一杯になりました。

当然、福山分校での練習にも熱が入り、可能な限り、土曜には本部に合流して稽古をするようにしました。

中四国大会では、一試合目から決勝までオーダー変更はせず、「これで負けるようでは、全日本でも通用しない。」という気持ちで臨み、負ける気持ちは全く起きませんでした。

結果として、中四国大会三連覇、全日本大会ベスト一六という成績を残すことができ、また、中四国大会四連覇、五連覇に続く基になったと思っています。

# 六連覇ならず

第一八・一九・二〇回中四国学生剣道優勝大会連続優勝  
広島大学 昭和五〇年卒

今岡 雅彦



私は、三連覇をめざしている年に入学しています。この年にはすでに下田先輩をはじめ多士済済の顔ぶれでありました。工学部の狭い道場で、四〇人程度の人間がひしめき合って練習しているのを見て、感激した事を覚えています。

とにかく強そうな人がゴロゴロいて、しかも新入部員に目もくれない熱気があったのです。剣道が好きで自信もいささかあった当時の私は、この人達と剣を交えることが恐ろしくもあり、期待感もありました。

練習では自身の修行以外何物でもない雰囲気でありましたが、大会になると当然のように先輩方は優勝旗を手にしていました。中四国連覇を知ったのは随分後からです。

連覇はその後三、四、五と伸びましたが、そうい



## 五連覇の思い出

第一八・一九・二〇回中四国学生剣道優勝大会連続優勝  
 広島大学 昭和五〇年卒

城 英幸



今年には私にとって大学を卒業し、社会に入つて二〇年目の節目の年です。二〇年前を振り返り当時の事を少し思い起こしてみたいと思います。

五連覇を達成したのは、私達が三年生幹部の年でした。この年優勝できた一番の理由は四年生の選手層が非常に厚く、出場選手の大半を占めていたことです。五連覇の原動力は四年生の力であるということです。五連覇の原動力は四年生の力であるということです。五連覇の原動力は四年生の力であるということです。五連覇の原動力は四年生の力であるということです。

それに反し、翌年の大会、私達が四年生で六連覇に向けて臨んだ大会が強く心に残っています。前四年生が卒業し、大幅に選手が入れ替わり、戦力が大

きくダウンしてしまい、不安通りの結果となつてしまいました。六連覇はおろか全国大会にも出場できない苦汁を味わうことになりました。試合に負けた悔しさ以上に、我々四年生の力不足で、三年生幹部に優勝を味あわせてやれなかった申し訳なさが心にこたえました。忘れもしません、岡山大学との対戦で、副将の私の負けでそれが決定付けられたのでした。対戦者は八田さんで、我が剣道部二年生八田君のお兄さんでした。ほとんどいい処なく敗れてしまいました。この事が縁かどうか分かりませんが、同じ会社に入社することになり、職場は違いますが大変御活躍の由、嬉しく思っています。

最後に、私の大学剣道部時代、いやこれ迄の剣道人生の中で一番心に強く残っているのは、やはり大森玄伯先生と中西一先生のお二人にお会いできたという事です。

四年間の稽古で、私の剣道の基礎を作っていたいただきました。しかしながら当時は、教えてもらおう側のレベルが低すぎるため、教えてもらったことの何十分の一も理解できなかったはずであり、今この時点でもう一度稽古を付けていただき、お話をお伺いしたいという気持ちで一杯です。もう今では、大森先生の馨咳にも接することができず、ましてや剣を交えることもできません。無念でなりません。ただせめての救いは、卒業後一度だけではありますが、平成四年度の初稽古の時に、大森先生のお言葉と、稽古をいただいたということです。大切な思い出を作らせていただき、心より感謝申し上げます。

今後はお二人の教えをしっかり心に抱いてお二人に少しでも近づけるよう、剣道、仕事、人生に精進してまいりたいと思っております。

う状況でしたので、選手ではありませんでしたが、私には当り前のように思え、連覇の重圧も責任感も無かったように思います。

六連覇がかかった四年生の時も決勝まで進んで、そこで予想される某大学に勝てるかどうかなどとの大きな事を考えていました。ところが、予選リーグで敗退し、祝勝会の予定は一転残念会となり、その席で初めて連覇の意味と六連覇できなかった事の重大さが身に染みて感じられたのです。

五連覇の時代は下田先輩を中心とした選手層の厚さもありますが、なによりも中四国の「雄たるべし」という伝統と、全日本で活躍したいという夢や故大森玄伯師範の剣道理論と精神などが融合して進取の気鋭があったというのは言い過ぎでしょうか。しかし、OBの方も毎日三〜四名はかわるがわる練習にきていただいで意気高ぶっており、当時は皆それに近い心境にあったように思います。

この連覇の、というよりも広島大学剣道部の歴史に諸先生方の恩は忘れることはできませんが、とりわけ故大森玄伯師範の存在は私たちの技術と精神の拠り所でありました。「覇者の剣より王者の剣」と常に正々堂々を説かれ、連覇を意識する事なく新しい目標に向かって研鑽をする事ができました。「自分が一番弱いと思つて練習し、試合は一番強いと思つてのぞめ」とも教えられました。

忘れてはいないがはっきりとは思い出せないこの連覇の時代。偉大なる先生、先輩方が私たちに剣の道と、広島大学剣道部の伝統とを心底愛情を注いで教えていただき、それを学ぼうと真摯に情熱を注いだ私たちの青春。

二〇年たった今、栄光というより連覇を途絶えさせた者として当時を振り返ってみました。

# 栄光への道のり

第三六回中四国学生剣道優勝大会優勝

松山大学 平成二年卒

山崎克弘

松山大学の、男子団体中四国連続優勝が始まったのは、ちょうど松山商科大学から松山大学へ、また昭和から平成へと、何か時代の大きな移り変わりの年でした。

高沢部長をはじめ、石田師範、青野監督からの剣道における技術、精神面の御指導の他、多大な物心両面の支援の御陰があったからだと思います。試合前はもちろんのこと、部員全員を、よく焼肉などを食べに連れて行ってくださったことが、部内の交流を深め、団結力の向上へとつながっていったように思われます。また、打突の弱さの補強にと、一キロの木刀を購入していただいたりと、大変恵まれておりました。その他、愛媛県警、刑務所をはじめとし、市内の諸先生方から、稽古をつけていただくなど、環境は中四国で一番であったと思います。

当時の練習は、毎日休みなく稽古がある他、月曜から土曜の雨の日以外は朝練を行なっておりました。

## トップレベルを目指して

第22・23・24回中四国学生剣道優勝大会連続優勝  
松山商科大学 昭和53年卒

岩崎 誠一



我々にとっては、夢のような事でした。今、振り返ると、当時、四年連続優勝（昭五〇〜五三年）することは決して甘いものではありませんでした。勝つてあたり前、勝つのが当然といった鈍々たるメンパーを擁していた時代もあれば、我々の時代のように、とても優勝にはほど遠いといった時もありました。

日々の厳しい練習の成果が優勝につながったという事はいまでもないことで、記憶が薄らぎながら行なったかか稽古。少々の風邪で熱があっても「練習して汗をかいたら風邪なんかは治る。」これが諸先輩方の口癖でした。

当時の想い出で一番記憶に残っている事は、中四国での連続優勝は無論、毎年春に実施していた遠征練習試合のことであります。年に一度、春先に遠征に出かけるわけですが、従来は、ほとんど関西方面への遠征でありました。しかし、ある年、某先輩が

「今年は東京へ行く。」と言い出したのです。我々は正直言って、「田舎の大学が関東のそれもトップレベルの大学だけを選び遠征試合を申し込む。結果は目に見えている」と思ったものでした。

遠征試合の結果は、予想通りひどい結果に終わりました。しかし、トップレベルの剣道を自分自身で見、肌で感じる事ができ、今思えば、これが、ひとつの転機になったように思います。

常にレベルアップ、技術の向上を目指すことは当然のことではありますが、日々、常に上を目標に、程々が妥協することなく、毎日の練習に打ち込んで中四国のレベルが少しでもアップするよう願っております。

なお、最後になりましたが、中四国学生剣道連盟四〇周年のお慶びと、今後益々連盟が発展いたしますようお祈り申しあげます。

ランニングとストレッチを主体としたものですが、松山城周辺の五キロのランニング、腕立て、腹筋、背筋、スクワットのメニューは、朝から冬でも汗だくになるほどで、よくやっていたなと思います。朝起きて、雨が降っていたときの喜びは、今だに忘れられません。この朝練に寝坊したときは午後練で、四年生全員への掛け稽古がまわっているのです。それはもうみんな必死で、その日は一日中この掛け稽古で終わるといふこともしばしばでした。このおかげで、地力をつけた選手も少なくはなかったようです。

このような中、連続優勝の大きな要因は、部内の改革が少しずつ行なわれていったのが、よかったように思われます。個人の自主性を前面に出せるような体制にと、おかしな上下関係をなくし、先輩、後輩及び同輩が、風通しのいい関係へとだんだん移り変わっていったように思われます。

その結果、ここの一番といふときの団結力となり、接戦をもにできたように思われます。普段の稽古においても、これまでは諸先生方へ、一年生から掛かって行くような流れがありました。それを四年生が主体となり、強くなるためには、自らがしんどい思いをするようにと、一番に稽古をつけていただくような形へと変わり、学年に関係なく競争するようになってきました。

このような、ちょっとした気のもち方や、行動により部内のいやな雰囲気はなくなり、新しいよい風が入るようになったことが、結果としてつながっていったように思います。

この団体連続優勝の記録は、ひとえに良き先生、良き先輩、良き同輩、そして良き後輩に恵まれた御陰で、大変感謝の思いでいっぱいです。本当にありがとうございます。

## 無意識の勝利

第三・四回中四国女子学生剣道優勝大会連続優勝  
広島大学 昭和五四年卒

岸田明美



全国に先がけて女子団体戦を取り入れた中四国学生剣道大会の第二回目から、広大女子は、連続して三年間タイトルを取りました。

昭和五〇年春の大会は、松商大で開催され、波多野さん・船木さん・谷さんのメンバーで高知大学を敗って優勝されました。団体の場合、たとえ一人だけが強くてもその戦いを制することはできず、三人の力が結集されてこそ優勝を勝ち取れるのです。この年、それが実証されたことの意味は大きく、大きな喜びであったそうです。また、この初優勝は、私たち後輩の大きな励みにもなりました。

五年に広島で開催された秋の大会では、徳島文理大学を敗り、連続優勝をしました。メンバーは、谷さん、安永さん、岸田の三人でした。当時は、女子部員の少ない学校もあり、三人というのは、女子団体戦を成立させるためのぎりぎりの人数でした。しかしそれは、自分が勝つか、最悪の場合でも引き分けて次の人へバトンタッチしなければ、チームを勝利へと導く事ができない人数でもありました。この日の初戦で先鋒を務めた私は、勝ちましたものの大変緊張していました。そのため、山本先輩の指示で、二回戦からは、安永さんが先鋒となりました。

これが功を奏し、安永さんの落ち着いた剣道が、次々と相手を倒し、私も精神的に楽になって戦え、大将の谷さんへと引き継ぎ、とうとう優勝することができました。この試合は、私たちに団体戦の一人一人の責任の大きさを感じさせるものでした。

次の五二年は、再び松山商大で春に行なわれ松尾さん、織口さん、岸田のメンバーで、愛媛大学を敗って優勝しました。この年、連続三回目の優勝ということでしたが、そのためのプレッシャーはほとんどありませんでした。それよりも、広大剣道部員の皆さんの温かい支援を受けて、三人が全力で戦い、それが結果的に優勝につながったのだと思います。この年は男子の優勝も重なったため、その喜びは今までの何倍にも感じられました。

このように振り返ってみると、広大女子が三年連続優勝したのは部員の皆さんに支えられて、選手が優勝を意識することなく戦ったことが、このような幸運につながったのだと思います。また、団体戦だったからこそ、それを達成することができたのだと思います。

最後に、中四国学生剣道連盟の今後益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。